

めくらぶどうと虹 《にじ》

宮沢賢治

青空文庫

城しろあとのおおぼこの実みは結むすび、赤あかつめ草くさの花はなは枯かれて焦こげ茶ちやいろ色いろになり、烟はたけの粟あわは刈かられ
ました。

「刈かられたぞ」と言いいながら一いっぺんちよつと顔かおを出だした野の鼠ねずみがまた急いそいで穴あなへひっこ
みました。

崖がけやほりには、まばゆい銀ぎんのすすきの穂ほが、いちめん風かぜに波なみだ立たっています。

その城しろあとのまん中に、小さな四しつ角かく山やまがあつて、上のやぶには、めくらぶどうの実み
が虹にじのように熟うれていました。

さて、かすかなかすかな日照ひでり雨が降ふりましたので、草くさはきらきら光あり、向むこうの山やまは
暗くらくなりました。

そのかすかなかすかな日照ひでり雨が霽はれましたので、草くさはきらきら光あり、向むこうの山やまは明あ
るくなつて、たいへんまぶしそうに笑わらっています。

そつちの方かたから、もすが、まるで音譜おんぷをばらばらにしてふりまいたように飛とんで来て、
みんな一度いちどに、銀ぎんのすすきの穂ほにとまりました。

めくらぶどうは感かん激げきして、すきとおつた深ふかい息いきをつき、葉はから雫しずくをほたほたこぼしま

した。

東の灰色の山脈の上を、つめたい風がふつと通って、大きな虹が、明るい夢の橋のようにやさしく空にあらわれました。

そこでめくらぶどうの青じろい樹液は、はげしくはげしく波うちました。

そうです。今日こそただの一言でも、虹とことばをかわしたい、丘の上の小さなめくらぶどうの木が、よるのそらに燃える青いほのおよりも、もつと強い、もつとかなしいおもいを、はるかの美しい虹にさげると、ただこれだけを伝えたい、ああ、それからならば、それからならば、実や葉が風にちぎられて、あの明るいつめたいまっ白の冬の眠りにはいっても、あるいはそのまま枯れてしまってもいいのでした。

「虹さん。どうか、ちよつとこつちを見てください」めくらぶどうは、ふだんの透きとおる声もどこかへ行つて、しわがれた声を風に半分とられながら叫びました。

やさしい虹は、うっとり西の碧いそらをながめていた大きな碧い瞳を、めくらぶどうに向きました。

「何かご用でいらつしやいますか。あなたはめくらぶどうさんでしょう」

めくらぶどうは、まるでぶなの木の葉のようにプリプリふるえて輝いて、いきがせわし

くて思うように物が言えませんでした。

「どうか私のうやまいを受けとつてください」

虹は大きくといきをつきましたので、黄や堇は一つずつ声をあげるように輝きました。そして言いました。

「うやまいを受けることは、あなたもおなじです。なぜそんなに陰気な顔をなさるので
すか」

「私はもう死んでもいいのです」

「どうしてそんなことを、おつしやるのです。あなたはまだお若いではありませんか。それに雪が降るまでには、まだ二か月あるではありませんか」

「いいえ。私の命なんか、なんでもないんです。あなたが、もし、もつと立派におなりになるためなら、私なんか、百ペンでも死にます」

「あら、あなたこそそんなにお立派ではありませんか。あなたは、たとえば、消えることのない虹です。変わらない私です。私などはそれはまことにたよりのないのです。ほんの十分か十五分のいのちです。ただ三秒のときさえあります。ところがあなたにかがやく七色はいつまでも変わりません」

「いいえ、変わります。変わります。私の実の光なんか、もうすぐ風に持つて行かれま
す。雪にうずまって白くなってしまいます。枯れ草の中で腐ってしまいます」

虹は思わず微笑いました。

「ええ、そうです。本とうはどんなものでも変わらないものはないのです。ごらんなき
い。向こうのそらはまっさおでしよう。まるでいい孔雀石のようです。けれどもまもな
くお日さまがあすこをお通りになって、山へおはいりになりますと、あすこは月見草の
花びらのようになります。それもまもなくしぼんで、やがてたそがれ前の銀色と、それ
から星をちりばめた夜とが来ます。」

そのころ、私は、どこへ行き、どこに生まれているでしょう。また、この眼の前の、美
しい丘や野原も、みな一秒ずつけずられたりくずれたりしています。けれども、もしも、
まことのちからが、これらの中にあられるときは、すべてのおとろえるもの、しわむも
の、さだめないもの、はかないもの、みなかぎりないのちです。わたくしでさえ、ただ
三秒ひらめくときも、半時空にかかるときもいつもおんなじよろこびです」

「けれども、あなたは、高く光のそらにかかります。すべて草や花や鳥は、みなあなた
をほめて歌います」

「それはあなたも同じです。すべて私に来て、私をかがやかすものは、あなたをもきらめかします。私に与えられたすべてのほめことばは、そのままあなたに贈られます。ごらんなさい。まことの瞳でもものを見る人は、人の王のさかえの極みをも、野の百合の一つにくらべようとはしませんでした。それは、人のさかえをば、人のたくらむように、しばらくまことのちから、かぎりないのちからはなしてみたのです。もしそのひかりの中にならば、人のおごりからあやしい雲と湧きのぼる、塵の中のただ一抔も、神の子のほめたもうた、聖なる百合に劣るものではありません」

「私を教えてください。私を連れて行ってください。私はどんなことでもいたします」
 「いいえ私はどこへも行きません。いつでもあなたのことを考えています。すべてまことのひかりのなかに、いつしよにすむ人は、いつでもいつしよに行くのです。いつまでもほろびるということはありません。けれども、あなたは、もう私を見ないでしょう。お日様があまり遠くなりました。もすが飛び立ちます。私はあなたにお別れしなければなりません」

停車場の方で、鋭い笛がピーと鳴りました。

もずはみな、一ぺんに飛び立って、気違いになったばらばらの楽譜のように、やかまし

く鳴きながら、東の方へ飛んで行きました。

めくらぶどうは高く叫びました。

「虹さん。私をつれて行ってください。どこへも行かないでください」

虹はかすかにわらったようでしたが、もうよほどうすくなって、はつきりわかりませんでした。

そして、今はもう、すっかり消えました。

空は銀色の光を増し、あまり、もすがやかましいので、ひばりもしかたなく、その空へのぼって、少しばかり調子はずれの歌をうたいました。

青空文庫情報

底本：「銀河鉄道の夜」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年7月20日改版初版発行

1993（平成5）年6月20日改版71版発行

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。（青空文庫）

入力：薦田佳子

校正：平野彩子

2000年8月25日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

めくらぶどうと虹 《にし》

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>